

ヤルートを奇跡の島と呼ぶ人もいる。

太平洋戦争の末期、日本の守備隊がことごとく玉砕かそれに近い状況に陥ったマーシャルやギルバートの島々の中であって、多数の将兵が生き残った島の一つである。

ヤルートでの戦病没死は陸海軍合わせて二百十数名ほどで、二千数百名いた守備隊総員のほとんどの者は無事日本へ復員したのである。

志村秀次郎の身分は南洋第二支隊の大隊長で、ヤルート守備隊陸軍最高指揮官であった。



挿絵 (S. Ikemoto)

そしてこの第二支隊には松山の百二十二連隊が配属されていた。中田大助はヤルート島機関銃部隊の小隊長で階級は行方不明になった松岡と同じ中尉、少佐の志村は八歳年上であった。

ヤルート守備隊の司令官は海軍少将の杉山喜八だったが、杉山は志村の人柄と軍歴を高く評価していた。杉山司令は、対空戦闘の指揮権だけ自らが執り、敵の上陸攻撃に対する防御計画と訓練並びに戦闘指揮は志村に一任していた。

志村はまじめ一徹の人間で、そのまじめぶりは時には度をこすこともあった。訓練の最中に敵のグラマンが本当に襲ってきたことがあり、かれはまる裸の指揮台で平然と訓練続行の命令を出した逸話がある。何事にも不器用で頑固な人柄ゆえにかえって部下の信頼はあつかった。

廁からもどった秀次郎は、冷静さをとりもどしていた。かれは、廁で今朝ほこらで見た杉山司令の温顔を思い浮かべていたのだ。

どうせ、夢の話である。

「それで、松岡の様子はどうでした」

と、秀次郎は大助に訊いた。

仕合せかどうか、気になった。

「あいつ、カナカ族の娘と一緒になりました」

子供もたくさんできた。ぜひ家に案内したいからついて来いと誘われ、大助はカヌーに乗ったのだ。

青い海を一つ渡り、大きな島へ上陸した。

砂浜をすこし歩き、松岡が立ち止まった。

ヤシのしげる林の奥を指さし、あそこだといった。目をこらした大助に白い建物が見えた。見覚えがある。それは何とヤルート守備隊の司令部だったのだ。

おい、あれは、と声をあげふりかえった。と、松岡は背をむけ、みるみる走り去って行った。

松岡を呼びとめる自分の声で、大助は夢からさめたのである。

「あとで切のうなっただけど、ええ夢をお大師さんから授^{さず}かったです」

大助は頬をうっすら色づかせている。

色つやがよく、少年の面影をのこす大助に酒を注ぎながら、自分もヤルートへ行けば司令に会えるかもしれん、とありもしないことがふと元大隊長の脳裏をかすめた。

城山の日陰に入ったのか、窓の日差しが消えている。

秀次郎は、窓の棧に置かれた一輪挿しの水仙へ視線を移した。当時、松岡は逃亡したアメリカ兵捕虜に殺害されたものとだれもが信じ、疑わなかったのだ。三人の捕虜を処刑したあとで、島民から松岡を見かけたという情報が何度か寄せられたが、真偽のほどは最後までわからなかった。

秀次郎は目をつむった。

「大隊長」

と大助が秀次郎を呼んだ。

酔ったときはいつもそうだ。

大助は正座した。すると小柄なかれの目線はかつての上官と同じ高さになった。

相手はなお目を閉じている。

酔いにまかせて、大助はいった。

「戦争したもんしか、戦争のことはわからんです」

それだけのことだが、いうとかれは何かほっと、肩の力がぬけるのがわかった。

秀次郎は黙っている。

大助は、さらにつづけた。

「ヤルートでは、もう人間をこえたもんがみなをつき動かしたとったです」

戦争裁判で、最期まで部下をかばった大隊長へのいたわりの言葉だった。

何度も喉まで出かかり、そんつどいいだせないでいた言葉だった。志村を松山へ迎え入れた頃に口にすれば、ヤルートで斬首した三名のパイロットの土にまみれた紅顔が目に浮かび、スパイ容疑で銃殺した十三名の島民の骸^{むくろ}がぞろぞろ起き上がってきそうであった。その上、志村は自決した杉山少将に対する自責の念に苦しんでいることを大助はよく承知していた。大隊長が司令を追って自裁する道を選ばなかったのは、部下への責任感だった。

五十年待ってやっといえたのである。

秀次郎は目をあけた。

動じた風はない。

眼差しはやさしかった。

「すみません、ちょっと子供のようなことをいいました」

大助はすなおにわびた。

「歳月は慈悲だというが、いくら年がたっても事実だけは変りようがない」

と元大隊長は応えた。

グアムの戦犯裁判において、志村たち日本側は、ヤルートでのアメリカ兵捕虜処刑事件の主たる理由を、捕虜の逃亡と松岡中尉殺害にあると主張した。しかし、実のところ松岡の死体はついに見つからないままになっていたのである。その上、処刑した三人の若いパイロットは、松岡を殺してはいないと斬首される間ぎわまで言い張ったのだ。

だが、たとえ逃亡未遂や殺害がなかったにしろ、かれら三人は処刑されたであろう。ヤルートはその後、B24が落とすとした二千五百トン以上の爆弾で廃墟と化し、多くの兵士が死んだ。捕虜をまともに扱うことなど不可能な戦況に陥ったのである。

